

「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに 挑戦しよう！



養正館館長・渡辺貴斗

第56回



子どもたちに伝えることば（その7）

「ありがとう」と「ごめんね」

★「ありがとう」と「ごめんね」

子供たちに配布物を渡したときに、自然と「ありがとうございます！」とか、子供同士で不意にぶつかったとき双方が競うように「ごめんね」「ごめん！」と言い合っているのを聞いたりすると、ほほえましく、また嬉しくなりますね。逆にそれができていないとイライラして「ありがとうと言いなさい」「ごめんねは!？」と叱ってしまいます。

空手は武道ですから、このように「ありがとう」や「ごめんね」が言えるようになることは、とても大事です。また、月謝を払ってくださっている保護者の皆さんは、このような基本的な挨拶ができるようになってほしい、礼節を身に付けてほしいと、道場に期待して通わせています。私たちはその期待に応えなくてはなりません。

そこで、お礼や謝罪の言葉をきちんと言えるように、子供たちに半ば強制的に厳しく指導します。しかしながら、果たしてこの指導の仕方は本当に正しいのでしょうか？

★人間関係の潤滑油

1つ目の考え方としては、「ありがとう」と「ごめんね」は、1つのテクニックとする考え方です。この子がこれからの人生で「ありがとう」と「ごめんね」が言えるということは、いろいろな場面で人と人とのあいだの潤滑油として人間関係を良好に保つことができます。つまり、心がこもっていなくても、本当に感謝したり、謝罪する気持ちがなくても、ひとまず、ありがとう、ごめんねと言えば人間関係が良好に保てるということです。

これは生きていく上での重要な武器であり、処世

術です。そのように割り切れれば、「ありがとう」と「ごめんね」を、まるで機械のように反射的に言わせるのも、子供のうちに身に付けさせておくべき重要なスキルのひとつだと考えても良いかもしれません。

★幼児に強制する危険性

もう1つの考えは、納得して心から言えるように導くというものです。4歳くらいの子が、指導者に「ありがとうございます！」と大きな声でお辞儀をしながらきちんとお礼を言っている場面を見かけますが、本当に理解して、感謝しているのでしょうか？

「ありがとうございます、と言わないと先生やお母さんに叱られるから」と、何も考えず反射的に言っているのかもしれませんが。

東京家政大学の保育施設で42年間保育研究された井桁容子先生は「幼少の頃にありがとう・ごめんなさいをきちんと言える子は、大人になって言えなくなる危険性がある」と問題提起していらっしゃいます。

10年ほど前の県大会で、ある高校の空手道部の生徒さんが、初対面の私に笑顔で元気よく「おはようございます」と100点満点の挨拶をしてくれました。その高校生は、その後もいろいろな場面で自分から笑顔で挨拶してくれました。

彼が大学1年生になって、ある大会で彼を見かけたとき、私の方からいつものように笑顔で「おはよう」と声をかけると、絶対に私に気づいているはずなのに、彼は赤の他人のように目も合わせず無言ですれ違っていきました。

私はその態度の豹変ぶりに驚くとともに失望しました。コートに戻って、他の審判の先生方にこのエ

ピソードを話したところ、「その生徒は高校時代、自分で納得して心から挨拶していたのではなく、部活で強制されていたのだろう」と、複数の先生方が推察されました。また、「高校を卒業すると挨拶をやめてしまう。そういったことはよくあることだ」と、みなさん驚く素振りもありませんでした。

大変残念ではありますが、そう考えると納得できました。高校生でもこのような有様ですので、幼稚園児に強制的に挨拶や、「ありがとう」と「ごめんね」を言わせても、大人になってその必要性を感じなくなれば、言わなくなってしまうのかもしれない。また強制されると、「ありがとう」と「ごめんね」は嫌なもの、叱られて言わされるものと、トラウマになってしまうのかもしれない。

それではどのように指導したらよいのでしょうか？ それは、幼少のころから叱って強制するのではなく、本当に感謝の気持ちを感じた時に「ありがとう」、本当に申し訳ないと思った時に「ごめんなさい」と自然と言えるように導くということです。心から「ありがとう」と言えるまで気長に待ち、自分から言えたときに、その行動を評価してあげれば、「ありがとう」と言うこと自体が本人にとって良いイメージとなり、他者から強制されていないので、またそのような場面に出くわしたとき自分から素直に言えるようになります。

★先生が「ごめんね」と謝る

18年ほど前、指導を始めた頃の私は、間違った発言をしても、子供に間違いを指摘されても、素直に認めたり、謝ることができませんでした。自信の無さからくる「プライド」が邪魔をしていたのです。

私は若く経験も浅く薄っぺらで、それを子供たちに見透かされないよう、虚勢を張っていたのです。

ところが、今では年の功で、「どうもすみませんでした。先生が間違っていました。ごめんなさい」と頭を深く下げて謝っています。ちょっとフォーマルすぎる位にしっかり謝ります。そうすると子供たちは100%許してくれますし、みんなニコニコして最高の笑顔で返してくれます（実際はニヤニヤして）。

私のことを信頼してくれているので、その後の私の指導にもよくついてきてくれます。つい、「先生とは、威厳を持ってプライド高く指導しなければ、子供たちに尊敬されない」と考えてしまいましたが、怒鳴って従わせるのは最も簡単な方法です。過ちを認めない先生に、子供たちはついていきたくて思うのでしょうか？ 子供と指導者との間に信頼関係を築けば、子供は指導者の応援団となり、指導者が困った場面に出くわしても、積極的に協力してくれ、指導についてきてくれるようになります。素直に謝る先生を見て、子供たちはそんな大人を尊敬し、自身も素直な子に成長していけるのです。

PROFILE

■渡辺貴斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から空手の手ほどきを受ける。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2013年5名、2014年・2015年7名、2016年5名、2017年9名、2018年・2019年5名を全少入賞させ、一道場での全国最多入賞数の記録更新中。道場経営でも、一道場で350名を超える大躍進を続ける。



空手道場 養正館 / 静岡県沼津市本田町 11-12



どうやって道場生 350名に増やしたか？ その 15

◆成約率（入会率）は何%？

養正館では成約率（体験入門者が最終的に入会する率）は約90%です。80%でもなく100%でもありません。ここ15年ほどずっと約90%です。ということは体験入門の10人に1人が入会しなかったこととなります。

この入会しなかった人たちに毎回理由を聞いていますが、ほぼ全員が「家から道場まで遠すぎて通えない」、「他の習い事をたくさんしているのでこれ以上習い事を増やすことができない」の2つの理由を挙げます。でも、よく考えたら、この2つの理由は体験入門に来る前から分かっていたことです。よって、無料体験に来る人の中には、初めから入会する意志の無い人が1割ほどいるということになります。「無料なのでひとまず気軽に体験入門だけやってみた」ということなので

しょう。よって、全員が入会しなくても落胆する必要はありません。入会してくれなかったからといって、指導の方法を大幅に変えたりしてしまうと、そこでまた入会率が落ちてしまいます。

しかしながら、成約率が50%以下の場合、何か問題があるのではないかと考えてみる必要があります。聞き辛いは思いますが、入会に至らなかった理由をママさんに聞いてみて、それを記録して統計をとり、道場運営の問題点をはっきりさせることが必要です。体験入門だけで辞めていくママさんは、道場の悪口になってしまうので本当の理由は言い辛くて正直に教えてくれないかもしれませんが、そのような地道な調査を続けて、指導者自らが改善していく努力が必要だと思います。